

■序章 全ての始まり 長篠

一五七五（天正三）年、旧暦五月二十一日の未の刻だった。

既に太陽は南中高度を外れ午後の遅くの日差しになりつつある。その日差しの下、三河の国の長篠城から西に連なる一帯は硝煙と血の匂いで満ちていた。有海原と書いて「あるみはら」と呼ばれる一帯は北が山地、南を川に阻まれた逃げ場のない盆地である。そこに無数の武田の兵が斃れていた。千や二千ではない、恐らく万の単位だろう。

この光景に勝者の側である羽柴藤吉郎秀吉は戦慄していた。こんな戦を、そしてこんな数の死者を見た事が無かつた。圧勝どころではない、万の単位の敵軍をほぼ殲滅してしまったのだ。逃げ場のない一帯に追い込まれた武田軍は鉄砲隊による前後からの挾撃を受け、わずか半日で壊滅してしまった。天下無敵と謳われたあの武田軍がである。秀吉自身、織田軍指揮官の一人でありながら、目の前の光景が信じられなかつた。これが上様の、織田信長の戦いなのか。やはりあの方は別格だ。人の業とは思えぬ。勝ったのに体の震えが止まらない。圧倒的な経験だつた。すぐ横に居る羽柴家の副将、弟の小一郎を見れば、これもただ果然とした顔で一帯を見つめていた。それほどの勝利なのだ。敵将の武田勝頼こそ逃したが、その軍勢の再建はもはや不可能だろう。追う必要はあるまい。実際、総大将の信長から深追い無用の通達が出ている。

「見たか、藤吉郎」

その声に振り返ると前田又左衛門利家が立つていた。この圧勝の原動力、織田の鉄砲部隊を指揮した五人の鉄砲奉行の一人であり秀吉とは不思議と馬が合う男だった。十代の頃から信長に仕えて来た生え抜きの家臣であり、その心醉ぶりは信仰に近い。果然とする秀吉に対し、どうだオレの上様はという顔をしている。在野から織田家に潜り込み、その頭脳と度胸で軍団長の地位まで上り詰めた秀吉も信長に心服し同時に恐怖していた。だが今回の戦いを見てその感情

はさりに昇華され、今やこの利家の心情を完全に理解できた。尊敬、畏怖、陶酔などといった話では無い。信仰に近い絶対的な崇拜の感情である。そうか、ずっとこの気持ちと共にこいつは生きて来たのか。初めてその心情が理解できた。上様の生き様を最後まで見届けたい、そのお役に立てるなら己の全てを捧げても悔いはない。その恍惚とした秀吉の表情を見た利家は満足そうに笑つて言う。

「おうよ、さつさと行くぜ。上様に報告だ」

信長は本陣とした高松山と呼ばれる丘の上で一帯を眺めていた。その横には果然自失といった感じに立ち尽くす徳川家康の姿があった。知らぬ人間が見れば負け戦だったのかと思うような様子で、家康は半ば口を開けただ果然と有海原の方を凝視していた。身動き一つしない。それほどの衝撃的な勝利だった。長年、無敵武田軍団と死闘を繰り広げて来た家康は勝利を受け入れるのに時間が掛かると言う前代未聞の状態だった。その横に仁王立ちのまま戦場を睨みつける信長の姿があつた。周囲には直属の親衛隊、馬回り衆が控えている。

「鳴いたな」

その短い言葉に馬回り衆筆頭の堀久太郎秀政は一瞬戸惑つた。だが、すぐに向こうの山から聞こえるウグイスの声だと気がついた。先ほどまでの戦の喧騒が嘘のような初夏の静かな山間にその声はよく響いた。

「勝どきの声のようだ」

信長は時にこいつた言葉を漏らす。前田利家と羽柴秀吉が姿を見せたのはそんな時だった。幕をくぐつて本陣に入ると丹羽（にわ）五郎左衛門長秀、滝川左近一益の二人の姿が見えた。秀吉が姿を見せたことでこの戦に動員された織田の軍団長三人全員が揃つた事になる。常識人で人当たりの良い丹羽はニヤリと笑つて「来たか」と声を掛ける。対して荒武者の印象が強い滝川は何も言わず二人の方すら見なかつた。軍団長の中では最も若く新参者であった秀吉はそういった対応には馴れている。丹羽の声で二人の到着に気がついた信長が例によつて甲高い声を掛けて来る。

「どうだ」

主従を超えて、弟分のような存在だった前田利家が先に応える。

「見事な勝利にござりまする。拙者もいざれこのような戦をやつてみたいかと」

「犬、お主ならできるだろう。励め」

信長は上機嫌そうに笑いながら言う。犬とは利家の幼名、犬千代の事だ。信長は今でも興奮すると昔の癖が出るのかこの名で呼ぶ。

信長は次に睨むように秀吉を見た。知恵と度胸を買って、どこの誰かも判らぬこの男を軍団長にまで抜擢したが、これまでの所その期待によく応えている。

「それで、お前が武田ならどうした」

秀吉は信長の前に来るまでの道中、ずっとその事を考えていた。戦の後、もしそ自分が敵将だったらどうだったかを考えるのがこの男の癖だった。時にはオレなら負けなかつたと思い、時にはどうやっても上様には勝てぬ、とも思う。そしてほとんどの戦は後者だった。信長は秀吉のその癖を知っている。ここでつまらぬ世辞や美辞麗句を並べても通じないのが信長と言う男だ。だが今度の戦は美しいまでに完成されもはや芸術に近い戦いだった。勝てる気が全くしないと秀吉は思った。よって簡潔かつ正直に述べる。

「長篠城への奇襲、武田軍の退路を断つ策がこの戦の決め手でございました。敵が全く予想していなかつた手であり防ぐのは不可能。加えて陣地前の柵で前方突破も不可能とし、狭い土地に閉じ込めた。その上で武田の兵を前後から鉄砲で滅多撃ち。必勝の策であり逃げる事すらできませぬ。拙者でも何も出来なかつたでしょう」

しばしの沈黙ののち、信長が応える。

「お前がそこまで言つとはな」

「本心でござります」

「知つとる」

「「」の戦は上様の…、いえ日の本の戦における最高傑作かと思ひます。これを間近に見られた事、望外の幸いで「」ざいました」

「そうか」

再び上機嫌な様子で信長が応える。だが秀吉はそこで話を終わりにしなかつた。拙者、いつかこれを超える戦をしたいと存じます」

「」の一言に周囲の人間は凍り付くような顔で秀吉を見た。オレが信長を超える、と言うに等しい言葉である。直後にパーンと大きな音がした。信長が秀吉の前頭部、剃り上げられた月代（さかやき）を平手打ちにしたのである。叩かれた場所に真っ赤な手形付く。誰もが息を呑んだが、意外な事に信長は上機嫌で大笑いしていた。

「」の六本指がぬかしもあるわ。やつてみる。「の日で見届けてやる」

「必ずや」

そう言つて頭を下げる秀吉の頭を信長は再度、パーンと叩いた。「の男なりの愛情表現なのだろう。利家はその横で、そのやり取りを何か不思議なものを見るように黙つて眺めている。

この日、想像を超える戦を見たことに秀吉は密かに恐怖した。まさに戦争芸術だった。自信家の「」の男でも、いつかはこれを超える事が出来る、とは断言できなかつた。「」の長篠の戦を知つた事は幸いであると同時に乗り越えねばならぬ呪いとなる。そう思つた。それほどの戦だった。